

Policy Note

JICA Ogata Research
Institute No. 13
August 2024



留学経験が大学教員の活動や大学の国際化にもたらすインパクト

—東南アジアの主要な大学における実証研究から—

萱島 信子*

要約

- JICA 緒方貞子平和開発研究所は、大学教員の留学経験がその後の教員の教育研究活動や大学全体の学術活動にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにするため、マレーシア、インドネシア、ベトナム、カンボジアの主要大学 10 校を対象に実証研究をおこなった。本ポリシー・ノートは、この研究結果から得られた政策的示唆を取りまとめたものである。
- 提言 1：途上国の大学教員の留学経験は、大学の教育研究活動全般にプラスのインパクトをもたらしている。なかでも、教員が留学をつうじて得た国際的なネットワークや語学力、国際的な経験は、大学の国際化を促進して、途上国のリーディング大学の質の向上に大きく貢献している。高等教育の国際化に大学教員の留学が果たす役割を十分に理解することが重要である。
- 提言 2：途上国において、大学教員の留学は大学の国際化に重要な役割を果たす一方で、国内の大学院教育の発展のためには国内就学の促進も重要である。教員の上級学位取得に関する政策において、留学と国内就学のバランスを十分に考慮するべきである。また、国内の大学院プログラムにも国際的な学術経験を得させる機会を組み合わせる必要がある。
- 提言 3：途上国の大学教員の留学先国は特定の国に集中する傾向にあるが、留学先国の多様化は、豊かな国際ネットワークを築いて大学の国際化に貢献するのみならず、大学に多様な留学経験をもたらす、留学先国によって異なる強みと弱みを最大限いかすことにもつながる。大学教員の上級学位取得のための留学は、公的な奨学金でまかなわれることが多いので、奨学金を提供する途上国政府・先進国政府・国際機関などは、留学先の多様化に十分に配慮すべきである。
- 途上国においても、学術の発展には国際的な協力と競争が必要な時代になった。途上国の高等教育の発展のためには、国内の大学院プログラム育成とバランスを取りながら、大学教員に多様で豊かな留学の機会を提供し、留学経験がいかされる環境を整備することが重要である。

ポリシー・ノートは、主に JICA 緒方研究所の研究の結果や過程で得られた知見や提言を要約し、エビデンスに基づいた情報を政策決定者・実務者に提供するとともに、開発政策に関する国際社会の議論に貢献することを目的としています。なお、ここで述べられている見解は執筆者個人の見解であり、JICA や JICA 緒方研究所としての見解を示すものではありません。

* JICA 緒方貞子平和開発研究所 顧問 兼 シニア・リサーチ・アドバイザー

1. 東南アジアの大学における教員の留学インパクトに関する実証研究

今世紀に入り、世界の留学生数は急速に拡大した。2000年から20年間の間に、留学生数は約2百万人から6百万人に増え（OECD 2021）、先進国の高等教育人口における留学生の割合は4.0%から8.3%へと増加した（UNESCO Institute for Statistics 2023）。こうした留学生数拡大の背景には、前世紀末から急速に進展するグローバル化によって人の往来が拡大したこと、途上国の発展により世界の高等教育人口が増えたこと、高等教育の国際化によって留学を促進する仕組みが整備されたことなどがある。開発の文脈においても、かつては頭脳流出の観点から否定的に捉えられることが多かった途上国から先進国への留学は（Altbach 1981, 2003）、現在は、むしろ頭脳循環の表現によって、高度人材の流動性やネットワークによる情報や技術の移転の側面が肯定的に評価されることが多い（Lee, J. J and Kim 2010, Saxenian 2005）。持続的開発目標（SDGs）の一つに、途上国向けの留学奨学金の拡充が掲げられたのは（SDG4. b）、留学が開発にもたらす効果についての認識が高まったことの証左でもある。

このように、留学が途上国の社会経済発展にもたらす効果について共通の認識が醸成されつつある一方で、これまでの高等教育研究や留学研究においては、留学経験者の個人レベルでの知識や意識の変容、就業や収入への効果などが検討されることが多く（Asada 2017, Paige et al. 2009, Teichler 2017, Teichler and Staube 1991）、留学経験者が所属する組織や社会への留学のインパクトを明らかにする研究は極めて少なかった。人材育成の効果が発現するまでに要する長い時間や、留学帰国者が働く就業環境の多様さから、留学プログラムの組織的・社会的効果を測定することは容易ではなかったためである。しかし、世界の留学生数がますます増加し、留学プログラムがさらに拡大するなかで、その社会的意義を明らかにする必要性は大きい。

そこで、JICA 緒方貞子平和開発研究所は、留学の組織的なインパクトを明らかにする研究プロジェクトに着手した。このプロジェクトは、経済や学術の発展が著しい東南アジアの4カ国（マレーシア・インドネシア・ベトナム・カンボジア）のリーディング大学¹10校²を取り上げて、それらの大学教員の留学経験³を明らかにし、さらに留学経験がその後の大学教員の活動や大学全体の発展にどのようなインパクトを及ぼしたのかを明らかにするものである。この研究では、対象大学10校の全教員を対象とした質問紙調査を実施し、一部の大学教員や高等教育専門家に半構造化インタビューをおこなった⁴。このポリシー・ノートはこれらのデータの分析から得られた政策的示唆を取りまとめたものである。

2. 海外留学のインパクト

本研究の質問紙調査では、留学を経験した教員（以下、SA（Study abroad）教員と記す）の海外留学のインパクトと国内就学のみ教員（以下、SH（Study at home）教員と記す）の国内就学のインパクトに関するデータを収集した。図1は両者のインパクトの差を示したものであるが、ここから、まず、留学経験は教員のそ

¹ リーディング大学とは、学術的な優秀さや研究による貢献、社会への影響力が認められている大学を指し、高い学術基準や厳格なプログラム、著名な教員集団、国際的な評価、豊富な資金やインフラ、そして卒業生の成功などを特徴としている。本研究プロジェクトでは、対象国4カ国のそれぞれについてもっとも代表的な総合大学と科学技術分野の大学を調査対象に選んだ。

² マレーシア：Universiti Sains Malaysia, Universiti Teknologi Malaysia、インドネシア：Universitas Gadjah Mada, Institut Teknologi Bandung、ベトナム：Vietnam National University, Hanoi, University of Science and Technology、カンボジア：Royal University of Phnom Penh, Institute of Technology of Cambodia, Royal University of Agriculture, Royal University of Law and Economics

³ 本研究の目的は大学教員の業務に対する留学経験のインパクトを分析することであるので、大学教員の養成課程として重要である大学院レベルの留学経験を取り上げている。学部段階での留学や1年未満の短期留学は分析の対象外としている。

⁴ 質問紙調査では、3,288人の大学教員から回答を得（回答率25%）、インタビュー調査は137人の教員や高等教育行政官を対象におこなわれた。

の後のさまざまな教育研究活動にプラスのインパクトをうんでいること、さらに、教員の国内的な活動よりも国際的な活動においてより大きなインパクトをうんでいることがわかる。国際学会での発表、国際共同研究、海外研究者の招聘、外国語での授業、海外の大学との学生交流といった教員の国際的な活動に関して、留学のインパクトが著しい。

インタビュー調査では、留学をつうじて築いた海外とのネットワークが、その後の教員の国際的な活動に重要な役割を果たしていることがたびたび語られた。大学院での指導教員やその他の教員、学友との強いつながりは、帰国後の共同研究の実施や国際共同教育プログラムの形成に貢献している。また、留学によって培われた語学力、国際的な経験や自信も重要な役割を果たしている。

近年、東南アジアの高等教育は急速な拡大を経験しているが、各国政府は量的拡大とともに、質の向上にも努めている (Altbach 2004, Lee, M. N. N 2006, Welch 2011)。そして、高等教育の国際化が進展するなかで、リーディング大学の質の向上と国際化は密接につながっている。特に、国内でハイレベルの高等教育・研究コミュニティが必ずしも大きくない途上国においては、リーディング大学はグローバルな学術コミュニティに参加して切磋琢磨することが、その成長のためには必須である。世界に伍するレベルの研究大学を目指すこれらの大学において、教員の留学経験が大学の国際的な教育研究活動にプラスのインパクトを生んでいることは重要な意味がある。

国内的な教育研究活動への留学のインパクトは、質問紙調査の量的な分析では、国際的な活動へのインパクトよりも小さかったが、インタビュー調査からは教員の留学経験が興味深い質的变化をもたらしていることが示された。例えば、学生が受動的に参加する授業から主体的な参加を求める授業への変化、暗記型・情報伝達型の授業から討論中心の授業への変化、学生が自由に発言できるようより水平的な教員・学生の関係づくり、学生の実習や実験の充実、学生の実験実習への教員の参加などである。途上国の多くの大学教員は、教育者としての特別な訓練を受ける機会が少ないため、自分が学部や大学院で受けた授業や研究指導が自分自身が教員になった際のモデルとなることが多い。その意味でも、留学先国で自分の母国でのものとは異なる授業や研究指導のスタイルに触れ、時には教授助手や実験助手として留学先大学の教育活動に参加する経験は、帰国後の教員の活動に貴重な影響を及ぼしている。

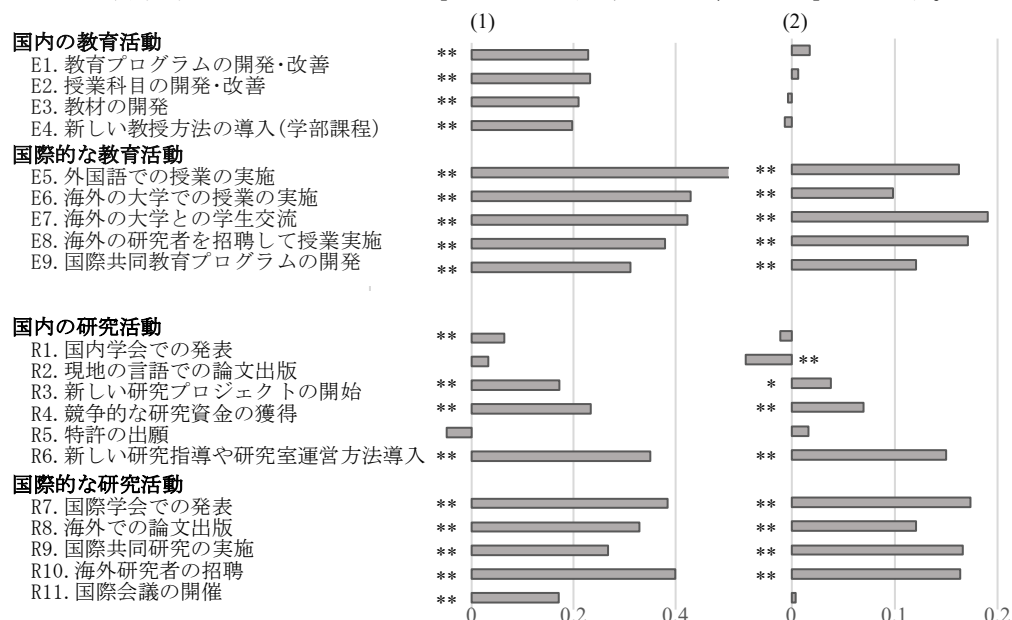
こうした教員の留学経験がもたらすインパクトは、プログラム開発、海外大学との共同教育プログラム、大規模な国際共同研究など、教員個人を超えて学部レベルや大学レベルで組織的に取り組む教育研究活動にもインパクトを及ぼしている。一人ひとりの教員がそれぞれ教室や研究室で取り組む教育研究活動を越えた学部や大学単位の活動も、その構成員である教員の経験や能力によるところが大きく、教員の留学経験は、個々の教員へのインパクトを超え、学部レベル・大学レベルでの教育研究の発展に貢献している。

留学のインパクトに関しては、質問紙調査でもインタビュー調査でもポジティブなインパクトが多く示されたが、帰国後の適応に関するネガティブなインパクトもあわせて確認された。研究環境、給与水準、官僚主義、不正・腐敗などは、多くの途上国の高等教育に共通する課題であるが (Altbach 2003, Moon 2023)、長期の留学から帰国した教員はこれらの課題に強いストレスを感じ、さらに自分の国や大学の学術コミュニティに溶け込むことが難しい、留学による長期の不在により国内就学のみ教員に後れを取っていると、疎外感や焦りを感じているケースがあるのである。しかし、見方を変えれば、これは帰国教員が長期にわたる留学を経て、母国の大学の文化や価値観とは異質なものを持ち帰っていることの証左でもある。貴重な留学経験が母国の大学や学術コミュニティにポジティブな変化をもたらすような方策を講じることが望ましい。

図1：海外留学と国内就学のインパクトの比較（教育活動・研究活動）

(1) SA 教員と SH 教員の認識の差
 「あなたの留学経験（もしくは国内就学経験）は次の活動をおこなうための知識や技術を高めたか」の問いに対し、「1=非常に高めた、2=ある程度高めた、3=少ししか高めなかった、4=まったく高めなかった」から回答。

(2) SA 教員と SH 教員の活動の差
 「過去5年間に次の活動をおこなったか」の問いに対し、「1=ある、2=ない」から回答。

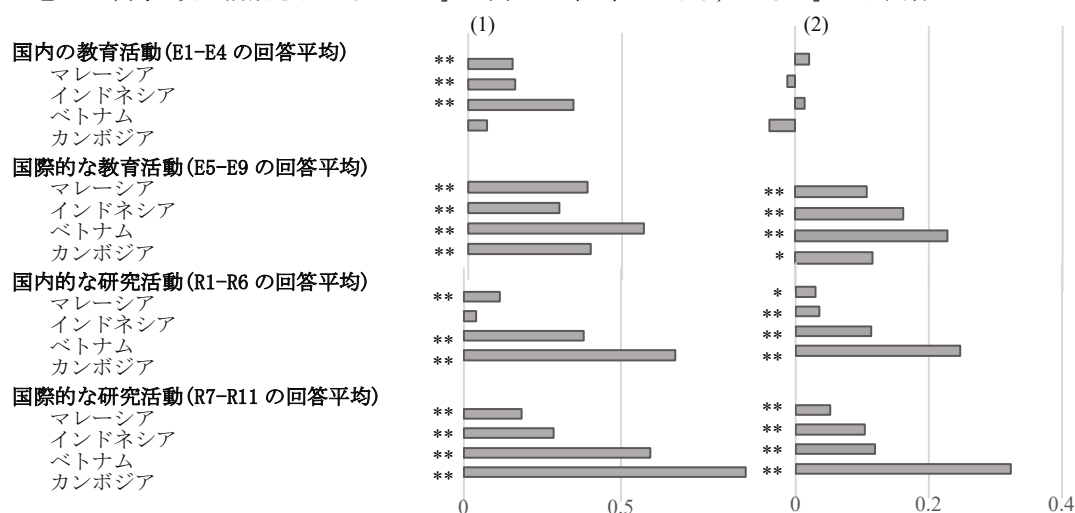


注1：グラフは、SA 教員の回答値平均と SH 教員の回答値平均の差を示す (SH 群－SA 群)
 注2：* p<0.05, ** p<0.01
 注3：SA 教員数 2,000 人、SH 教員数 937 人

図2：海外留学インパクトの出身国別比較

(1) SA 教員と SH 教員の認識の差—出身国別比較
 「あなたの留学経験（もしくは国内就学経験）は次の活動をおこなうための知識や技術を高めたか」の問いに対し、「1=非常に高めた、2=ある程度高めた、3=少ししか高めなかった、4=まったく高めなかった」から回答。

(2) SA 教員と SH 教員の活動の差—出身国別比較
 「過去5年間に次の活動をおこなったか」の問いに対し、「1=ある、2=ない」から回答



注1：グラフは、教員を出身国別にグルーピングしたうえで、SA 教員の回答値平均と SH 教員の回答値平均の差を示している (SH 群－SA 群)
 注2：* p<0.05, ** p<0.01
 注3：マレーシア SA=482 SH=382；インドネシア SA=1,096 SH=397；ベトナム SA=225 SH=126；カンボジア SA=187 SH=26

提言 1

大学教員の留学経験は、大学の教育研究活動全般にプラスのインパクトをもたらしている。なかでも、教員が留学をつうじて得た国際的なネットワークや語学力、国際的な経験は、大学の国際化を促進して、途上国のリーディング大学の質の向上に大きく貢献している。高等教育の国際化に大学教員の留学が果たす役割を十分に踏まえた高等教育政策の立案が必要である。

3. 国内の高等教育の発展と海外留学

本研究における2点目の重要な発見は、国内就学に比した留学のインパクトは、出身国の高等教育が発展するにつれて小さくなることである。SA教員とSH教員のインパクトの差は、概ねカンボジア、ベトナム、インドネシア、マレーシアの順に小さくなる(図2)。さらに言えば、SA教員のインパクトは国間で若干の差があるがその差は小さく、一方、SH教員のインパクトは国間の差が大きい。国内の大学院教育が発展しその質が向上するにつれて、国内就学インパクトと留学インパクトの差が縮まっていることを示している。

国間のインパクトの差は、特に国際的な研究活動において大きい(図2)、このことは、学術出版数の比較においても確認された(図3)。外国語での論文・書籍チャプターの発刊数をSA教員とSH教員の間で比べると、マレーシアでは前者が後者の1.3倍、インドネシアでは1.6倍、ベトナムでは2.1倍であり、カンボジアでは7.0倍にのぼる。

マレーシア、インドネシア、ベトナムでは国内学位取得者が急速に増えている(図4)。インドネシアとマレーシアでは2000年頃から、ベトナムでは2010年頃から国内の修士号取得者が増加し、今や外国の修

図3：留学経験教員と国内就学経験教員の学術出版(外国語の論文・書籍チャプターの数の平均値)

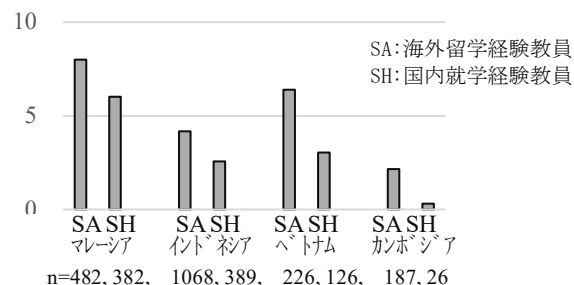
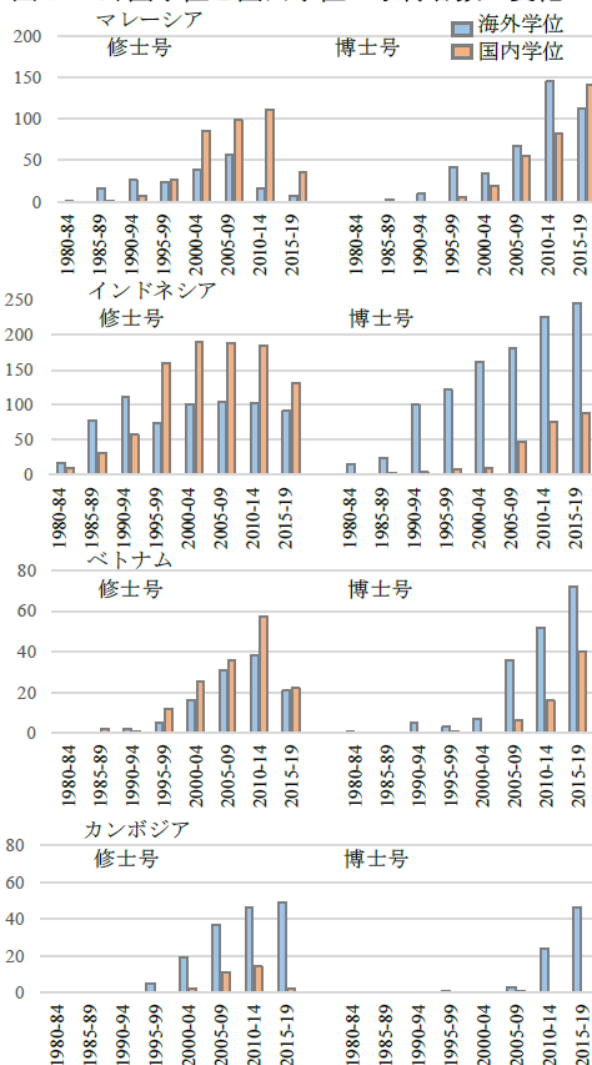


図4：外国学位と国内学位の取得者数の変化



士号取得者よりも多数である。一方、博士号は修士号ほどではないが、特にマレーシアとインドネシアで国内博士号の取得者が増えている。大学院教育の量的な発展とともに、大学院教育の質も、これまでの海外学位取得を代替する方向で向上しており、その結果、国内就学と海外留学のインパクトの差は縮小しているのである。カンボジアでは、いまだ外国の上級学位取得者がほとんどであるが、いずれは他国の例のように、自国の大学院プログラムが発展し、国内学位取得者が増えていくであろう。

大学院教育の発展は、高等教育システム全体の成長にとって重要なステップである。リーディング大学の大学院プログラムは研究活動の基盤であるのみならず、その国全体の大学教員の養成課程の役割を果たすからである。そして、国内の大学院教育の発展のためには質の高い教員や整った教育研究環境に加えて、質の高い学生が必要である。したがって、マレーシアやインドネシアのように大学院プログラムが発展しつつある国においては、優秀な学生をすべて海外留学に送り出すのではなく、専門分野を考慮したり、国内の大学院と海外の大学院を比較したりして、国内での学位取得を促進する必要があるだろう。

その一方で、国内就学者にとっても国際経験を持つことは今後ますます重要になるので、例えば、ダブルディグリープログラムを整備したり、国内就学者に短期留学や国際学会参加などの機会を提供するなどして、国内就学でも国際的な学術経験を得られるような教育環境を作ることが重要である。

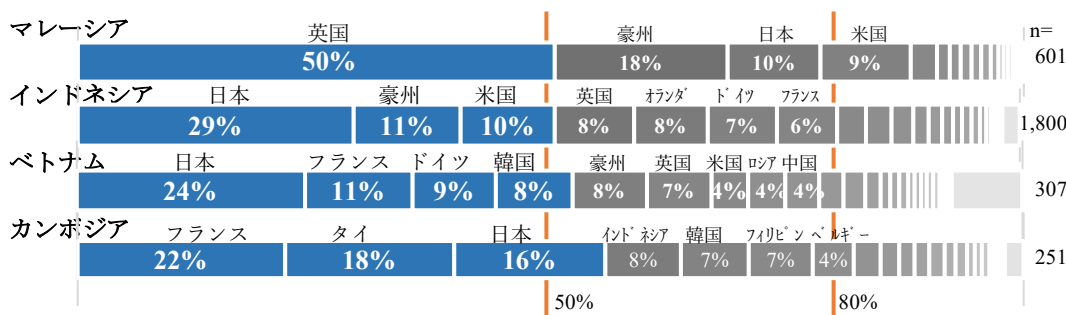
提言 2

大学教員の留学は大学の国際化に重要な役割を果たす一方で、国内の大学院教育の発展のためには国内就学の促進も重要である。教員の上級学位取得に関する政策において、留学と国内就学のバランスを十分に考慮するべきである。また、国内の大学院プログラムにも国際的な学術経験を得させる機会を組み込む必要がある。

4. 留学先国の多様性

この研究プロジェクトでデータを収集した約 2,000 人の SA 教員の留学先は、比較的少数の留学先国に集中している（図 5）。マレーシアの最大の留学先国は英国であり、その割合は SA 教員の 50% に達する。インドネシアとベトナムでは日本（それぞれ SA 教員の 29%、24%）が、カンボジアではフランス（SA 教員の 22%）が最大の留学先国であり、これらインドネシア、ベトナム、カンボジアの 3 か国ではトップの 3～4 の留学先国でそれぞれ SA 教員の 50% を超える。上級学位取得のための留学は長期にわたるため、4 か国の SA 教員のほとんどが何らかの留学奨学金を得て留学している⁵。そのため、こうしたスカラーシップの有無とスカラーシップ提供者の意向が、留学先国の決定に大きな影響を及ぼしている。

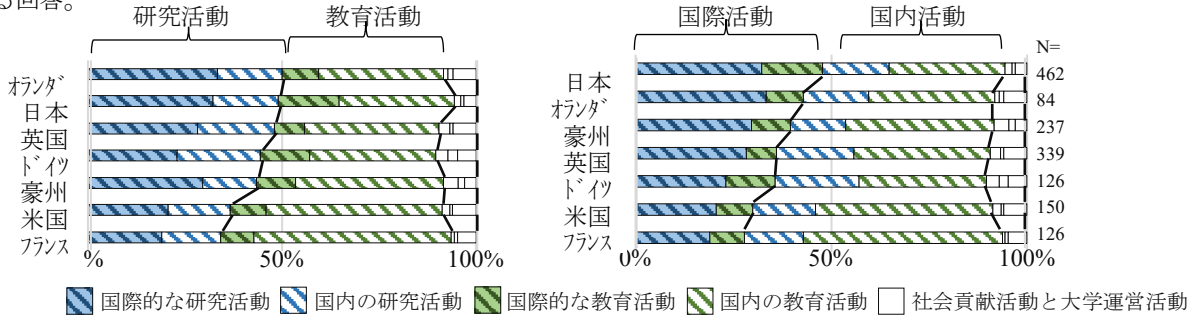
図 5：主要留学先国（出身国別）



⁵ 留学奨学金受給率はいずれの国でも 90% を超えるが、その提供者は国によって大きく異なる。すでに中進国となったマレーシアでは SA 教員の 88% が自国政府や自国の大学の奨学金を受給しているのに対し、カンボジアでは SA 教員の 70% が国際機関や先進国の奨学金により留学している。

図6：留学経験によって最も促進された教員の活動

「あなたが留学をつうじて得た知識・技術・ネットワークによって最も促進された活動は、(1)国内の研究活動、(2)国際的な研究活動、(3)国内の教育活動、(4)国際的な教育活動、(5)社会貢献活動や大学運営活動のうちどれか」の問いに対する回答。



注：留学者が80人以上いる留学先国のみ掲載。

留学経験はその後のどのような職務を最も促進したかを SA 教員に尋ね、その結果を留学先国別⁶に示したのが図6である。留学先国別に、最も多くの教員が挙げた活動を見てみると、オランダや日本への留学者は国際的な研究活動（それぞれ33%、32%）をあげ、その他の5カ国では国内的な教育活動があげられた。この結果を、研究活動（国際+国内）と教育活動（国際+国内）、さらに国際活動（研究+教育）と国内活動（研究+教育）にそれぞれ集計して比較すると、日本やオランダへの留学は研究活動や国際的な活動を促進し、フランスや米国への留学は教育活動や国内活動を促進するとして教員の認識が明らかになる。対象教員へのインタビューにおいても、研究活動に強い日本留学、教育活動に強い米国留学という留学先国別の特徴について賛同が示されるとともに、その要因として、それらの国における教育プログラムの差異に加えて、留学先国との学術関係の継続性⁷などが指摘された。

リーディング大学の教育研究の発展に必須の国際化を促進するためには、多様な留学先国をつうじて豊かな国際ネットワークを築くことが重要である。加えて、留学先国によって異なる強みと弱みを最大限にいかす点でも、留学先国の多様化が重要である。途上国の高度人材の留学先は、それぞれの国の歴史的背景や地政学的条件から、旧宗主国などの欧米の国に集中していることが多い (Altbach 2003)。また近年は、世界大学ランキングの隆盛により、ランキングが留学先大学選定の重要な指標として活用されることもある。しかしながら、留学先国や留学先大学を数値化された指標で比較することは難しいいうえに、こうした傾向は多様さがもたらす豊かさを失う可能性も含んでいる。さまざまな国に留学した教員が集まることで、大学の教育研究の改善においても多様な選択肢が生まれ、国際化の推進においても多くのパートナーとの協力の機会がもたらされる。本研究の対象国においても、リーディング大学の教員の留学先は数カ国に集中する傾向にあったが、留学先国や専門分野の特徴を踏まえつつ、留学先国の多様化を図ることが重要である。留学先国の選定には留学奨学金の存在が大きく影響しているため、奨学金を提供する途上国政府、先進国政府⁸、国際機関などは、この点に十分留意する必要がある。

⁶ 4 개국合計の留学先上位7カ国は、日本、英国、オーストラリア、米国、フランス、ドイツ、オランダであるので (SA 教員の 80% をカバー)、ここではこの7カ国を取り上げている。

⁷ 本研究の質問紙調査結果からは、留学帰国後に指導教員と連絡を取り続ける割合は、日本やオランダからの留学帰国者は70%以上であるのに対し、英国、米国からの留学帰国者はそれぞれ38%、48%であった。日本の大学国際化に関する研究では、日本側においても、帰国留学生との学術関係維持の意欲が高いことが明らかになっている (Kayashima 2019)。

⁸ 先進国政府は、ODAによる留学スカラーシップ事業において、自国の高等教育国際化や高度人材獲得の必要性和、相手国の高等教育開発の効果をバランスさせることが重要である。

提言 3

途上国の大学教員の留学先国は特定の国に集中する傾向にあるが、留学先国の多様化は、豊かな国際ネットワークを築いて大学の国際化に貢献するのみならず、大学に多様な留学経験をもたらし、留学先国によって異なる強みと弱みを最大限いかすことにもつながる。大学教員の上級学位取得のための留学は、公的な奨学資金でまかなわれることが多いので、奨学金を提供する途上国政府・先進国政府・国際機関などは、留学先の多様化に十分に配慮すべきである。

5. 変化する留学の役割

上記の3点の分析結果から見えてくるのは、途上国において留学の意義が変化しつつあることである。途上国の多くの大学は西欧の大学をモデルとして誕生し、教員の留学をつうじて西欧の進んだ知識や技術がもたらさせることによって発展した。そこでは留学の目的は外国の学問を自国に持ち帰ることであった。しかし、1990年代から東南アジアの高等教育の急速な成長と世界の高等教育のグローバル化が同時に進行し始めた。こうした大きな高等教育の地殻変動のもとで、東南アジアの大学教員の留学の役割は“進んだ外国の知識や技術の移転・導入”から“国際的な学術ネットワークへの入り口”へと変わりつつあるように思われる。

途上国においても、学術の発展には国際的な協力と競争が必要な時代になった。途上国の高等教育の発展のためには、国内の大学院プログラム育成とバランスを取りながら、大学教員に多様で豊かな留学の機会を提供し、留学経験がいかされる環境を整備することが重要である。

<参考文献>

- Altbach, P. G. 1981. "The university as center and periphery." *Teachers College Record*, 82(4), 1-16.
- Altbach, P. 2003. "Centers and peripheries in the academic profession: The special challenges of developing countries." In *The decline of the guru: The academic profession in the third world*. New York. Palgrave Macmillan US.
- Altbach, P. G. 2004. "The past and future of Asian universities: Twenty-first century challenges." In P. G. Altbach & T. Umakoshi (Eds.), *Asian universities: Historical perspectives and contemporary challenges*. (pp. 13–32). JHU Press.
- Asada, S. R. 2017. *Japan as the gateway to Asia and beyond: The long-term impacts of US undergraduate study abroad experiences* (Doctoral dissertation). Tokyo: Waseda University.
- Kayashima, N. 2019. *Daigaku no kokusaika to ODA sanku (Internationalization of higher education and ODA participation of Japanese universities)*. Tamagawa University Press.
- Lee, J. J., & D. Kim. 2010. "Brain gain or brain circulation? U.S. doctoral recipients returning to South Korea." *Higher Education* 59 (5): 627-643.
- Lee, M. N. N. 2006. "Higher education in Southeast Asia in the era of globalization." In J. Forest, & P. G. Altbach (Eds.), *International handbook of higher education* (pp. 539–555). Springer, Dordrecht.
- Moon, R. J. 2023. "Returning Talent." In *The Oxford Handbook of Higher Education in the Asia-Pacific Region*, 832(1,225), 451.
- OECD. 2021, *Education at a Glance 2021: OECD Indicators*. OECD Publishing.
- Paige, R. M., Fry, G. W., Stallman, E. M., Josić J. & Jon J.-E. 2009. "Study abroad for global engagement: the long-term impact of mobility experiences." *Intercultural Education*, 20(1), S29–S44.
- Saxenian, A. L. 2005. "From brain drain to brain circulation: Transnational communities and regional upgrading in India and China." *Studies in Comparative International Development* 40 (2): 35-61.
- Teichler, U. 2017. "Internationally mobile academics: concept and findings in Europe," *European Journal of Higher Education*, 7(1), 15–28.
- Teichler, U., & Steube, W. 1991. "The logics of study abroad programmes and their impacts," *Higher Education*, 21(3), 325–349.
- UNESCO Institute for Statistics. 2023. UIS.Stat bulk data download service. Retrieved 16 Nov 2023.
<http://data.uis.unesco.org/>
- Welch, A. 2011. *Higher education in Southeast Asia: Blurring borders, changing balance*. Routledge.

<JICA 緒方研究所関連出版物>

- Kayashima, N., M. Sugimura, K. Kuroda, and Y. Kitamura, 2024, *Impacts of Study Abroad on Higher Education Development—Examining the Experiences of Faculty at Leading Universities in Southeast Asia*. Springer.
[Impacts of Study Abroad on Higher Education Development: Examining the Experiences of Faculty at Leading Universities in Southeast Asia | SpringerLink](#)
- Moeliodihardjo, B. Y. 2023. *Higher education in Indonesia: Impacts from study abroad programs on academic institutions*. JICA Ogata Sadako Research Institute for Peace and Development.
https://www.jica.go.jp/Resource/jica-ri/publication/booksandreports/sgjqgc0000004o51-att/20230313_indonesia.pdf
- Nguyen, T. A. 2023. *Higher education in Vietnam: Impacts from study abroad programs on academic institutions*. JICA

Ogata Sadako Research Institute for Peace and Development. Retrieved September 8, 2023.

https://www.jica.go.jp/jica-ri/ja/publication/booksandreports/sgjqgc0000004nvu-att/20230331_VietNam.pdf

Sirat, M. 2023. *Higher education in Malaysia: Impacts from study abroad programs on academic institutions*. JICA Ogata Sadako Research Institute for Peace and Development. Retrieved September 8, 2023.

https://www.jica.go.jp/jica-ri/publication/booksandreports/sgjqgc0000004o51-att/20230313_Malaysia.pdf

Sok, S., Khan, B., & Bunry, R. 2023. *Higher education in Cambodia: Impacts from study abroad programs on academic institutions*. JICA Ogata Sadako Research Institute for Peace and Development. Retrieved September 8, 2023.

https://www.jica.go.jp/jica-ri/ja/publication/booksandreports/sgjqgc0000004nvu-att/20230331_Cambodia.pdf

発行:

独立行政法人国際協力機構 緒方貞子平和開発研究所
(JICA 緒方研究所)

〒162-8433 東京都新宿区市谷本村町 10-5

TEL: 03-3269-2357 FAX: 03-3269-2054

URL: <https://www.jica.go.jp/jica-ri/ja/index.html>

